

平成14年4月18日
原子力安全対策課
(14-12)
<14時30分記者発表>

新型転換炉ふげん発電所 原子炉冷却材中の放射能濃度の上昇について

このことについて、核燃料サイクル開発機構から下記のとおり連絡を受けた。

記

新型転換炉ふげん発電所は、4月12日より調整運転中であるが、定格出力運転中の4月17日21時半頃、希ガスホールドアップ装置の活性炭吸着塔入口ガスモニタの指示値が通常値(約10cps)より高い値(約45cps)であることが確認された。その後、監視強化を行っていたところ、23時頃、同装置の活性炭吸着塔出口ガスモニタの指示値が上昇していることが確認された。

[入口：約55cps、出口：約1.2cps(通常値*約0.8cps)]

原因調査のため原子炉冷却水中のよう素濃度を測定したところ、通常値*($2 \sim 5 \times 10^{-2} \text{Bq/cm}^3$)に比べ高い($6.5 \times 10^{-2} \text{Bq/cm}^3$)ことが確認された。また、希ガスホールドアップ装置の活性炭吸着塔入口のガスを分析した結果、通常に比べて高い放射能濃度を検出した。

これらのことから、燃料集合体がわずかに漏えいしている可能性があるかと判断した。また、測定データ*の分析から、2ループ(A、B)あるうちAループに装荷されている燃料集合体が漏えいしていると考えている。

現在、原子炉冷却材中のよう素濃度は、直ちにプラントの安全上問題となるレベルではなく、監視を強化している。

なお、環境への放射能による影響はない。

* 通常値...前サイクルの実績値

* 測定データ... Aループ： $9.0 \times 10^{-1} \text{Bq/cm}^3$ (12時現在)

Bループ：検出限界以下